

親の教育支援と嗜癖

—ギデンズの嗜癖論からの考察—

比較教育社会学コース 柳 煌 碩

Parental Support in Children's Education as an Addiction:
Considering on The Perspective of Addiction by A. Giddens

Ryu Hwangseok

The purpose of this article is to consider the parental support in children's education as an "addiction" which is contained in the theory of late-modernity by A. Giddens.

I focused to feature of Giddens' discourse about "addiction" and the theory of late-modernity compare with discourses in clinical psychology.

Through on the perspective of addiction in the theory of late-modernity, i argued that educational support of parents is a kind of addiction to construct and protect "ontological security" of parental identity. Finally, this article considers the possibility of a viewpoint of the "addiction" to comparative sociological analysis.

目 次

1. はじめに
2. 嗜癖とは
 - A. 「嗜癖」と「共依存」の登場
 - B. A.W. シェフの嗜癖論
 - C. 社会学的嗜癖論の必要性
3. ギデンズの後期近代論と嗜癖論
 - A. ギデンズの後期近代論とモダニティのダイナミズム
 - B. 後期近代論における自己アイデンティティ
 - C. 後期近代における親密性の変容
 - D. 後期近代論における嗜癖
4. 嗜癖と親子関係
 - A. 「親になること」と「親という自己アイデンティティ」
 - B. 親としての自己アイデンティティと子どもの成長
 - C. 子どもの教育達成と親としての自己アイデンティティ
 - D. 嗜癖としての教育支援
5. 考察—嗜癖の比較社会学的展開可能性

注

引用文献

1. はじめに

子どもの教育に対する親の教育期待や教育支援を対象にした社会学や教育社会学の研究においては、子どもの教育に対する親の教育期待や教育支援の規定要因に主眼が置かれ、それがなぜ生じるのかについては十分議論されてきていない¹⁾。

子どもの教育に対する親の期待とそれに基づく教育支援は、親という個人が行う行為の一つとして捉えていく必要があると考えられる。そこで、本研究では、アンソニー・ギデンズの後期近代論における行為論、中でも特に「嗜癖」の概念に注目し、これまで所与のものとしてされてきた傾向にある親の教育期待や教育支援を社会学的観点から理論的に捉えることを目的とする。

本稿においてギデンズの後期近代論と「嗜癖」の概念に注目するのは、彼の議論が今日の社会を社会構造のマクロな変容から個人の行動や心性のミクロな変容までを包括する社会理論としての有効性を持つと考えられるからである(中村 2014)。したがって本稿では、ギデンズの嗜癖論が持つ特徴を臨床心理学などの分野における嗜癖および共依存論と区別したのち、ギデンズの後期近代論と其中的嗜癖論を整理する。それを踏まえて、子どもに対する親の教育期待および教育支

援を嗜癖として考察し、最後に比較社会学的研究への展開可能性について考察を行う。

2. 嗜癖とは

本稿では、嗜癖について社会学的観点から主にギデنزを参照することを述べたが、その前に主に臨床心理学における嗜癖と共依存の概念の成立と定義について検討する必要があると考えられる。というのは、主にアルコール依存（アルコールリック）を題材にして嗜癖に関する多数の議論が蓄積されている臨床心理学の分野における嗜癖・共依存論ではなく、なぜ本稿でギデنزによる社会学的観点の嗜癖論に注目するのかという疑問に答えるためである。

A. 「嗜癖」と「共依存」の登場

嗜癖（アディクション）の語は、広い意味で愛好・中毒・夢中といった意味を持つが、心理学や精神医学においては、それを一つの病理としそれに伴う行為や性格を表すための用語として用いられている。嗜癖（アディクション）は、中毒（イントキセーション）と混同しやすい言葉であるが、その違いについて、A.W.シェフの著書（1993）の「監訳者まえがき」において斉藤学は次のように区別している。

「中毒はドクにあたることであり、毒を摂取した“結果”として生じる“好ましからざる生理的変化”である。この場合、中毒した“人（個体、主体）”が、好んでそうしたか否かは問わない。一方、嗜癖では、主体の意志が問題になる。主体は“好きで”嗜癖するのである。従って人は工業用アルコール（メタノール）には中毒するのであって、嗜癖しない。飲料アルコール（エタノール）には嗜癖するが、これを飲めば中毒（酩酊）も生じる。」（p. x）

つまり、中毒が毒物による生理的反応で言うならば、嗜癖においては嗜癖を起こす人（主体）の意志（体験）による精神的反応であると言うことができる。

嗜癖への関心は19世紀のアメリカにおけるアルコールリックの問題がその発端であり、それから嗜癖問題の焦点は、薬物やギャンブルなどの依存に拡大するが、その過程で依存症者の周囲で彼・彼女らを支える者、つまり共依存の問題に移ったとされる（上野 2001）。

こうした中、嗜癖あるいは共依存に対する病因論に対して、精神医学や臨床心理学において打ち出された

仮説が「機能不全家族説」である。アルコールリックからギャンブル・ドラッグ・過食・過度の宗教的信念などへの嗜癖者のいる家族を「機能不全家族」と呼ばれ、そこで負った心的外傷が嗜癖や共依存の発生に繋がるといった指摘がなされるようになった（佐野 2000, Sack 2000, 上野 2001）。

それに対してKrestan and Bepko（1995）は、「機能する家族について人々が共有している仮定は、男性と女性の権力不均衡の上に成り立っている」と批判し、Tallen（1995）も「共依存やアダルトチルドレンと不可分に結びついている機能不全家族という見方は、この恐ろしいほど人種差別的で、資本主義的で、家父長的である」と批判している（上野 2001, pp.221-222）。

B. A.W.シェフの嗜癖論

臨床心理学の分野において嗜癖および共依存をより包括的に分析したA.W.シェフは、嗜癖を「物質嗜癖」と「プロセス嗜癖」と区別し、その根底にあるものを「嗜癖システム」と想定している。それぞれの嗜癖についてシェフ（1989=1993）の議論をまとめると以下の通りである。

第一に、「物質嗜癖」とは、アルコールやドラッグ、ニコチンやカフェインなどの摂取による嗜癖であり、物質を故意に体内に摂取することによって人工的に引き起こされる嗜癖である（p.28）。第二に、「プロセス嗜癖」とは、特定の行為や相互作用といったプロセスが嗜癖の対象となっていることを意味する。この場合は、仕事・ギャンブル・セックス・宗教などが含まれる（p.31）。これらをシェフは「二次的嗜癖（セカンダリー・アディクション）」と呼んでいる。

さらにシェフは、「二次的嗜癖」を誘発するものを「一次的嗜癖（プライマリー・アディクション）」と言う。これは彼女が「嗜癖システム」と呼ぶ、女性・有色人種などの「他者をコントロールしようとする幻想」（p.56）で構成された「白人男性システム」から生じる。そして共依存は、この一次的嗜癖の基本形である（p. xi）。つまり、嗜癖システムによって生じる一次的嗜癖、すなわち人間関係への嗜癖を断ち切ろうとする時、二次的嗜癖が生じるという解釈である。斉藤（1989）は、これら「一次・二次的嗜癖」の関係について次のように説明している。

「…（関係嗜癖の）基本は、他人に対するコントロールの欲求で、他人に頼られていないと不安になる人と、人に頼る事で、その人をコントロールしようとする

る人との間に成立するような依存・被依存の関係」であり、「…アルコール、薬物などへの依存やギャンブル、セックス、浪費などへののめり込みは、コントロールし切れない相手を断念しようとして生じる、怒りと寂しさの中から生じている…」(p.163)

こうしたシェフの嗜癖論の特徴は、物質とプロセス、そして人間関係といった区分を用いて嗜癖を分類したという点もさることながら、社会システム論的視点で「白人男性システム」といった「嗜癖システム論」を通して一次的嗜癖（共依存）と二次的嗜癖（物質・プロセス嗜癖）を理解しようとしている点にある（清水 2011）。

C. 社会学的嗜癖論の必要性

これまで検討してきたように、臨床心理学における嗜癖についての議論は、嗜癖者やその周囲の人々に関する経験的データを基に、嗜癖と共依存の定義と回復に向けた治療法が細かく記述されて来ている。ただ、臨床心理学において用いられている嗜癖・共依存論は、その細かい観察と治療方法の確立といった方向性の故に、嗜癖や共依存のプロセスや治療法が具体化されているものの、「より日常的な」嗜癖、または個々人の経験的要因を超えた要因を説明するための概念的枠組みが必ずしも十分だとは言えない。これは、諸嗜癖を促す「嗜癖システム」に注目したシェフの議論においても同様で、嗜癖を促すシステムがどう生まれ、どう構成されているのか、といった問題に対して十分な視点を提供しているとは言えず、個人が生きている社会と関連した問題として捉える必要がある（保田 2011）。

ここで筆者は、後期近代という時代状況といった臨床心理学に比べて広い視点で嗜癖について論じたギデンズ（1991=2005, 1992=1995）の議論がもつ有効性に注目したい。次章でより詳しく述べるが、ギデンズも嗜癖について「衝動強迫的に没頭する様式化された習慣であり、中断した場合に手に負えない不安感を生じさせるもの（1992=1995:110）」といった、臨床心理学と類似した定義を行っている。しかし、ギデンズの嗜癖論は、「存在論的安心を追い求める後期近代の自己」といった観点から議論を組み立てられており、臨床心理学において病理的だとみなされている嗜癖以外にの日常的な行動や現象をも嗜癖として射程に入れることが可能だと考えられる。

3. ギデンズの後期近代論と嗜癖論

本稿の目的は子どもに対する親の教育支援や教育行動をギデンズの後期近代論における「嗜癖」の観点から考察することである。ギデンズは、現代社会の構造的な特徴だけでなく、その中における人間関係、主体的行為、自己アイデンティティといったテーマについてマクロとミクロを繋ぎつつ理論的な整合性をもって説明している²⁾。その意味でギデンズの議論は、親子関係・教育支援・教育期待と親の自己アイデンティティに対する考察にも有用な手掛かりを与えてくれると考えられる。

本章では、ギデンズの後期近代論を概観し、彼の嗜癖論がいかなる理論的根拠をもって組み立てられているかを整理する。ギデンズの後期近代論は、前近代と近代の区別が重要なポイントとなっており、彼は前近代から近代への移行（「モダニティのダイナミズム」）の要素として「時間と空間の分離」、「脱埋め込みメカニズム」、そして「制度的再帰性」を挙げている。本章ではまず、それぞれの要素の内容を概観する。

また、ギデンズは前近代から近代への移行といったマクロな社会構造の変化に留まらず、人間関係や自己といったミクロな主体的行為にも目を向けている。これは、ギデンズの嗜癖というミクロな行為論が、後期近代論といったマクロな社会理論と繋がる重要な接点となるため、その整理を行った後に、ギデンズの嗜癖論について検討することにしたい。そのために主に参照するギデンズの著書は、『親密性の変容—近代社会に置くセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』（1992=1995）と『モダニティと自己アイデンティティ—後期近代における自己と社会』（1991=2005）である。

A. ギデンズの後期近代論とモダニティのダイナミズム

ギデンズの言う後期近代とは「徹底化された近代性（radicalized modernity）」として捉えられているが、その理論的根幹を成しているものは前近代との断絶、すなわち近代性自体の特徴そのものである。ギデンズが強調する近代性の特徴は「時間と空間の分離」、「脱埋め込みメカニズム」、「制度的再帰性」の三点が挙げられ、これらの諸要素は相互に関連している。

まず、時間と空間の分離、言い換えれば空間と分離された時間とは、「客観化された時間（objectified time）」と呼ばれる。ここでいう客観化された時間を可能にしたのは、機械時計の発明と普及が代表的な例

である。これによって「いつ」は「どこ」と切り離され、時間が「場所の状況拘束性を通して結びついていた」(1991=2005:19) 前近代とは異なり、場所の状況から独立した「時間」というものが近代において立ち上がったのである。

次に、脱埋め込みメカニズムは、上述の時間と空間の分離によって可能になる。ギデンズはこれを「抽象的システム」とも呼ぶ。つまり、時間と空間の分離によって、かつて時間と場所に特定され、具象化されていた(埋め込まれた)社会活動が、貨幣(象徴的指標)や専門的知識(専門家システム)などのより抽象的なものによって行われることを意味する。言い換えれば、それまでの前近代社会における社会活動は、時間と空間の結びつきに「拘束」されていたが、近代社会における社会活動は、時間と空間が分離され、より抽象的な指標によって「解放」されたと言えることができる。

最後に、制度的再帰性は、時間と空間の分離と脱埋め込みによる近代社会の特徴である。この近代社会の制度的再帰性について、ギデンズは「社会活動および自然との物質的關係が、新たな情報や知識に照らして継続的に修正を受けやすい(1991=2005:22)」状況であると説明する。ここでいう「継続的に修正されること」、つまり再帰性は、人間行為に内属する行為の再帰的モニタリングではなく、モダニティにおいて繰り返し生まれる新たな情報と知識によって近代的諸制度が持続的に問い直されることを意味する。

こうして近代における社会活動は、前近代に比べて継続的な問い直しを通して構築されていく性質(再帰性)を持つ。そしてこの性質は、マクロな社会構造からミクロな相互行為にまで浸透し、両者は近代の再帰性の中でお互いを構築し合っている(「構造化」される)とギデンズは言う。

これらの三つの様相によって、近代は前近代とは異なる(断絶された)ものとなり、前近代と区別される近代の諸要素は、その中で生きる個々人の主体的行為の根幹をなす自己アイデンティティにまで影響をもたらすという。こうした立場でギデンズは、近代における自己アイデンティティを「再帰的プロジェクト」と呼び、近代における自己は「生活史という観点から自分自身によって再帰的に理解され」るものであると言う(1991=2005:62)。

B. 後期近代論における自己アイデンティティ

ギデンズは、近代における自己アイデンティティの

特徴について次のように説明する。

「モダニティとはポスト伝統的な秩序であり、そこでは“いかに生きるべきか”という疑問に、いかに振る舞うべきか、何を着て何を食べるべきか—そしてその他の多くの事柄—について日々の決断を通じて答えなくてはならないし、また自己アイデンティティが展開する時間の流れなかでこの疑問を解釈しなくてはならない。」(1991=2005:16)

つまり、近代社会における自己とは、前節で検討したモダニティのダイナミズムによって常に問い直されながら構築されていくのである。例えば、過去の印刷物または今日のマスメディアによって得られるようになった諸経験は、媒介されたものとしての経験であり、これらは「時間と空間を横断して」遠く離れた場所での出来事が日常意識へ侵入することに繋がる。こうして「媒介された経験」で統合される世界は、「反実仮想的(counterfactual)」性格を持ち、この中を生きるということは、無限の可能性の中から何かを日常的に選択することであるが、そこに潜んでいるものは可能性だけではなく、リスクも含まれている。

こうした観点から、ギデンズは自己アイデンティティについて、「生活史と言う観点から自分自身によって再帰的に理解された自己である」(1991=2005:57)と解釈する。この過程で重要になってくるのは「存在論的安心(ontological security)」である。これは、「すべての人間生活がなんらかのかたちで対処している根本的な実存的問題に無意識や実践的意識のレベルで“答え”」(1991=2005:51)ること、つまり自らの存在に対する安心感を指す。この存在論的安心は、かつての伝統社会においては、行為や思考の情緒的・行動的「決まりごと」、すなわち伝統で代表される「ルーティン」を通して確保されてきた。しかし、近代における再帰的プロジェクトとしての自己、またその中核を成す存在論的安心は、常に修正される個人の生活史(自らのストーリー)の中で個々人が自ら理解し、獲得しなければならない課題となっているのである。

C. 後期近代における親密性の変容

これまで検討してきたように、ギデンズは、近代において個人の自己アイデンティティは、再帰的な問い直しという性質を持つようになったと指摘する。ただギデンズは、近代の諸特徴を個々人の自己アイデン

ティティにのみならず、個人と個人の間関係性、つまり「親密性」とその変化を説明する際にも用いている。やや先取りになるが、近代における親密性の特徴は、近代の自己と存在論的安心が「ひとへの嗜癖」に繋がるといったギデンズの嗜癖論において重要な意味をもつ。また、本稿の関心である子どもへの教育期待と支援が親子関係と切り離せないことを踏まえても捉えておく必要がある。

近代における親密性の特徴および前近代との相違点について、ギデンズは多岐にわたる話題に触れている。しかし、その中核をなしている概念は「純粋な関係性 (pure relationship)」である。ギデンズはそれを以下のように定義している。

「純粋な関係性とは、社会関係を結ぶというそれだけの目的のために、つまり、互いに相手との結びつきを保つことから得られるもののために社会関係を結び、さらに互いに相手との結びつきを続けたいと思う十分な満足度を互いの関係が生みだしていると思えず限りにおいて関係を続けていく状況を指している。」(1992=1995: 90)

純粋な関係性とは、近代における個人関係（例えば性的結合、婚姻、友人関係など）が持つ特質のことで、関係を結ぶ当事者間の情緒的満足度を唯一の要素として結ばれた関係である。これは、前近代の個人関係と比べて幾つかの点において異なる。第一に、純粋な関係性は社会的・経済的生活といった外的条件にはつなぎ止められず、反対に当事者間の情緒的満足といった内的条件によって始まり、またそれが失われることで終わる。そのため、純粋な関係性は途切れることのない再帰的な問いかけが核心的なものとなる。第二に、純粋な関係性においては自己投入（コミットメント）が必要とされ、関係における報酬は関係性の内部に存在する。この際に重要となるのは、当事者間の自律と感情と経験の共有およびそのバランスであるとギデンズは指摘する。

ギデンズによれば、以上のような純粋な関係性と代弁される近代の個人関係は、自己の再帰的プロジェクトにとって欠かせない要素となる。しかし、ギデンズは純粋な関係性が持つ特徴の故の限界をも次のように指摘している。「純粋な関係性は外的な道徳的基準を欠いているがゆえに、運命決定論的な時や人生の他の大きな局面においては安心の根拠としては脆弱なものなのである。」(1991=2005: 212)

D. 後期近代論における嗜癖

近代の再帰性と自己アイデンティティ、そして純粋な関係性。これまで検討してきたギデンズの議論の中に、本稿で子どもに対する親の教育支援や教育行動を捉えるための概念として注目しようとしている嗜癖が位置している。ここでギデンズによる嗜癖の定義とその論理について述べていきたい。ギデンズは、第2章で述べたような嗜癖の病理化に対して問題を提起しながら、嗜癖を「目新しい心理療法の対象というより、現実の現象となっている」と指摘する。以下、ギデンズによる嗜癖の定義と共に、嗜癖という概念がギデンズの後期近代論においてどのように位置づけられているかについて整理する。

ギデンズは、「嗜癖は、衝動強迫的に没頭する様式化された習慣であり、中断した場合手に負えない不安感を生じさせるもの」と定義している。その上、「嗜癖は、不安感を和らげることで、その人に心の安らぎをもたらすが、こうした安心感はずねに多少とも一時的なものである。」と説明する(1992=1995: 110)。それからギデンズは、嗜癖に見られる固有な特徴を以下のように述べている。

まず、(1)特定の経験や行動で一時的な開放感や勝利感といった快感、つまり高揚感を感じる。次に(2)一時的な高揚感を感じた特定の経験や行動を繰り返し高揚感を獲得しようと努力する。つまり、高揚感を感じようと執着し、高揚感を再び得る、そしてまた執着する、といった循環が始まる。しかし、(3)嗜癖を自分で抑制できないこと、そして嗜癖が一時的であることから、自らの嗜癖の行動様式に一時的に嫌悪感を抱く。これらの繰り返しを通して(4)嗜癖は自己の放棄、すなわち再帰的自己自覚的関与を一時的に放棄することになる。こうすることで、モダニティにおいて本来求められている自己の再帰的プロジェクトは、一旦中止される。そして、(5)自己の再帰的プロジェクトが中止されることで、存在論的安心は他の者や行動に置き換えられた形で見出されるようになる(1992=1995: 110-111)。

ギデンズによる嗜癖は、自己アイデンティティの確立と存在論的安心の獲得という、近代を生きる個人に課せられた課題に対する負の解決策であると言える。共依存は、その一つの形としての「ひとへの嗜癖」といった位置づけである。そして、前節で述べた純粋な関係性という近代の個人関係も、この人への嗜癖をより普遍的なものにさせていると言える。

ここで注目したいのは、嗜癪に対するギデンズの議論が、モダニティのダイナミズムと自己アイデンティティそして純粋な関係性といった、後期近代論という彼の社会理論の中に組み込まれていることである。言い換えれば、嗜癪に対するギデンズの説明には、彼の後期近代論における幾つかの理論的前提が含まれているのである。最も代表的な例は「前近代との断絶」を意味する伝統の消滅との関係である。ギデンズは嗜癪と伝統の関係について次のように述べている。

「嗜癪は、伝統が以前にもまして徹底的に一掃されており、また、それに相応して自己という再帰的自己自覚的達成課題がとりわけ重要な意味を呈するようになった社会の観点から、理解していく必要がある。」(1992=1995: 113)

つまり、嗜癪は、人々の行動様式や自己アイデンティティを規定し、存在論的安心を保っていた伝統から断絶されることで生じるとギデンズは解釈しているのである。換言すれば、自らの絶え間ない問いかけを通して自己を見出す必要のある近代という時代状況の中で嗜癪は生まれるのであり、その意味でギデンズは嗜癪を後期近代における「負の指標」と呼んでいる(1992=1995: 115)。

では、本稿の主眼である子どもへの教育期待と教育支援の「舞台」となる親子関係はどうだろう。ギデンズの議論において親子関係は「純粋な関係性の射程からは部分的に離れたところに留まりつづける。」(1992=1995: 109)。これはつまり、血の繋がりとといった「外的条件」が、親子・親族の関係を規定しているためであり、情緒的満足が鍵となる「純粋性」はないことを意味するし、そのためにギデンズの「ひとへの嗜癪」は、親子関係においては生じないといった捉え方も可能である。次章からはここまで検討したギデンズの議論、特に親子関係と嗜癪に焦点を絞って検討していきたい。

4. 嗜癪と親子関係

ギデンズは嗜癪を論じる際に、親子関係における嗜癪に対しても言及している。ただし、ギデンズの議論の中で登場する嗜癪と親子関係に関する議論は、「嗜癪という言葉をもっと広い意味で捉えれば」(1995, p.155)という程度の位置づけであり、特に接点を持つのは「回復」という観点からである。すなわち、嗜

癪がそうであるように、親子関係における「有毒な親³⁾」は、子どもに対して自己の喪失をもたらす。この意味において、嗜癪と有害な親は同様の分類、つまり自己の再帰的プロジェクトを妨げる「逆再帰的」または「負の指標」という同質性をもつ。そしてその回復に必要な諸過程も、「感情面での独り立ち」といった面で嗜癪と有毒な親からの克服が可能になるという類似性を持つ。

他方で、ギデンズの議論における親子関係は、嗜癪よりも親密な関係性の変化といった文脈でより多く論じられている。ただ、ギデンズが想定する親子関係の変化は、純粋な関係性という特徴を持った今日の男女間の関係と比べて比較的単純な、あるいは例外的な様相を見せるという。ギデンズはその理由について、親子関係がそもそも生物学的な要因(彼の言う「外的条件」)を挙げており、そのために「親子関係およびそれより広い血縁関係は、純粋な関係性の射程からは部分的に離れたところに留まりつづける」(1991=2005: 109)と述べている。

しかし、ギデンズは親子関係も他の親密な関係がそうであるように、伝統的な関係性からより純粋な関係性に近づいてきていると指摘する。本章では、親子関係が「純粋な関係」となりつつあるというギデンズの視点に基づきながら、子どもに対する嗜癪的態度や行動がギデンズが例えた「有毒な親」に限らずある種の普遍性を持っている可能性と、その一つの表れとして子どもの教育達成に対する支援といった行動に着目して論述したい。

A. 「親になること」と「親という自己アイデンティティ」

ギデンズは、後期近代における親子関係や親族関係の変化について次のように指摘する。

「親族関係は、かつては多くの場合、信頼感の当然視された基盤であった。しかし、今日、人びとは、そうした信頼感を互いに取り決めて手に入れていかなければならず、したがって、自己投入(コミットメント)のあり方が性関係と同じくらい重要な問題となっているのである。」(1992=1995: 146)

ここでいう親族関係は当然親子関係を含んでいる。つまり、かつて当然と見なされた親子間の信頼は、今日において男女間の関係がそうであると同様に、親と子どもの間でも獲得される対象となるのである。こ

うした観点から、ギデンズは今日における親は生物学的親であると同時に子どもに対して養育の責務や権利を負う継親でもあると述べている（1992=1995：147）。

別の言い方をすれば、今日における親とは、生物学的な根拠と共に情緒的な根拠をますますと要求されていると言えよう。つまり、後期近代における自己アイデンティティがそうであるように、親としての自己アイデンティティもまた再帰的に構成していかなければならないのである。

「親になる」ということは、ある人の生活史の中に重大な影響を及ぼす。親になるということとは、つまり子どもに対する諸感情や経験を通して自ら「親」としての自覚を育み、この新たな物語を自身の生活史の中に書き込むことである。こうして親になった人は、親としてのアイデンティティを新たに手に入れ、またその根拠、すなわち親としての自己における存在論的安心を子どもの出産だけでなくその後の養育を通して再帰的に問うていかなければならないのである。

B. 親としての自己アイデンティティと子どもの成長

前節で述べたように、親としての自己アイデンティティにおいて、子どもは極めて重要な要素となる。「親である」といった認識は子どもの出生とその後の養育を通して、生物学的にも情緒的にも育まれていくものである。たしかにこれは、ギデンズを引くまでもないような議論にも見える⁴⁾。しかし、子どもが成長して行くこと、またその時間の流れにおける親子関係の変化、そして親としての自己形成や維持、といった観点から親子関係を捉えれば、議論の範囲はより広がりを持つであろう。

ギデンズは、こうした観点から、「…モダニティにおいては、子どもが大人になって自律するにつれて、より多く純粋な関係性の要素が働くようになる。」（1991=2005：110）と指摘する。前章で検討した通り、純粋な関係性とは、手短かに言えば「対等な関係における当事者間の感情で構成される関係性」と言うことができる。これはつまり、親子の関係も子どもの成長に連れ、出産や日々の世話といった次元から、より複雑で且つ情緒的要素が重要になっていく次元へと移行を意味する。ここでは、前者を一次的親子関係、後者を二次的親子関係と呼ぶことにしたい。

生まれたばかりの子どもは、その無力さの故に大人（その殆どは親であろう）による全面的なケアを必要とする。これは、ケアする親の側からすれば、極めて明確な形で自らが親であるという認識が手に入るこ

を意味する。子どもが身体的にあるいは物理的に親の助けを必要とする時期、つまり一次的親子関係においては、親としての自己は比較的単純な過程を経て確立され、子どもに対する身体的または物理的庇護は、親としての自己における存在論的安心に結びつきやすい。

しかし、年齢の上昇に連れ子どもは次第に親の身体的・物理的な庇護を必要としなくなる。親にとってみれば、子どもの成長は、親としての自己の確立が以前よりも困難になることを意味し、「親として何をすべきか」、「何をもって親として果たすべき責務を想定し評価すればいいのか」といった存在論的疑問が次第に浮上する⁵⁾。

例えば、新生児や幼い幼児に対する親の存在論的安心感の獲得過程や責務と、小学校に入った子どもを持つ親のそれは明らかに異なる。前者において問題になるのは、子どもの健康発達やそのための庇護、すなわち日々の「面倒見」を通して解決できるものが主なものとなる。こうした一次的親子関係の諸様相は、ギデンズの言う「ルーティン」としての役割を果たすと言うことができる。

一方で後者である二次的親子関係においては、子どもの適性や将来、また親とのより緊密で高度なコミュニケーションなどが問題となり、一次的な段階と比べて非常に広範囲に渡って、しかも具体的な責務が課せられるようになってくる。つまり、二次的親子関係においては、親としての自己を取り巻く諸課題に対して一次的な段階における「ルーティン」が、もはや機能しなくなり、親子関係は次第に「純粋性」を帯びていく。そこで親としての自己は、再帰的モニタリングの対象となると共に親としての存在論的安心は揺れやすくなると考えられる。

C. 子どもの教育達成と親としての自己アイデンティティ

子どもの成長によって親としての自己アイデンティティが再帰的なモニタリングの対象となっていくと想定した場合、子どもの就学は親にとって非常に重要な影響を及ぼすライフイベントとなる。就学を通して子どもが公的な学校教育システムに入り込むことは、それまで私的領域内に留まっていた親の養育責務が、学業成績や学校歴などの形で公共領域において可視化・表記されることを意味する（山田 1994：34）。つまり、二次的親子関係の段階において、子どもの教育達成は、社会的レベルで親の存在論的安心を規定する重要

な軸となると考えられる。

さらに、子どもが就学を通して入り込む学校教育システムは、能力（メリット）を社会成員の地位配分の基本原理とするメリトクラシーの倫理で構成されたシステムの典型である。中村（2011）は、メリトクラシーの再帰性に注目しながら、「能力に基づく選抜が一般化する中で、能力に対する不安は大衆化する」と指摘している。中村は、メリトクラシーの倫理が学校教育システムと共に拡大されて行くにつれ、人々に「自分の能力がいかにどのものであるのか？」といった「能力アイデンティティ」（岩田 1981）の再帰的モニタリングに繋がると指摘している。

中村の議論を親としての自己アイデンティティに適用すれば、学校教育システムにおける子どもの教育達成は、「親としての自己」に対して一つの不安要素として捉えることもできるのではないだろうか。つまり、メリトクラシックな教育システムにいる本人（子ども）が能力に対する不安を抱くのと同様に、その子どもを持つ親も自らの親としての能力に不安を抱き、親としての自己アイデンティティにおける存在論的安心を確かめる際に欠かすことのできない参照軸となるのである。

D. 嗜癖としての教育支援

今までの議論にもとづけば、子どもに対する親の教育行動とりわけ教育支援は嗜癖的行動であると言える。第 3 章で述べたように、ギデンズの後期近代論における嗜癖は、「衝動強迫的に没頭する様式化された習慣」、「中断した場合手に負えない不安感を生じさせるもの」と定義され、再帰的自己アイデンティティの確立と存在論的安心の獲得という後期近代論の「課題」に対する負の解決策であると述べられている。

そこで、ギデンズの嗜癖論を本章で述べて来た「親としての自己アイデンティティ」に適用すればどうだろう。本章で検討したように、親子関係における関係性の特徴は、一次的親子関係から二次的親子関係へ移行していくことにあると考えられる。そのため、本稿で焦点を当てる親としての自己に対する再帰的モニタリングおよび存在論的不安は、生物学的な要因に基づき、また一次的な養育の責務が求められる時期である子どもの幼児期、すなわち一次的親子関係においては比較的安定した状態を保つことができると考えられる。

しかし、二次的親子関係では、第一に一次的な養育

はそれ以上必要とされなくなり、第二に子どもが能力主義的な学校教育システムに入ることによって、親の役割は次第に複雑化し、その影響力も減少していく。こうした状況の中で親としての自己アイデンティティは以前よりも再帰的モニタリングを求められ、存在論的安心もそれ以前と比べ獲得され難くなる。子どもの教育達成は、親としての自己を形作る重要な軸であると同時に主要な不安要素であるということが出来る。

したがって、親として「いかに生きるべきか、いかに振る舞うべきか」といった問題に対して、子どもに対する教育達成は一つの「答え」としての役割を果たすと考えられる。子どもの教育達成のために親が行う教育行動、例えば通塾や個人レッスンなどの私費の教育支援は、親の自己という観点からすれば嗜癖的行動に非常に近いものであると考えられる。これは、中村（2011）の「再帰的に能力アイデンティティを模索する自己にとっては、塾に通い続けることや「お受験」に熱中することは、その学習上の効果とは別に、能力不安を抑制する効果がある」といった指摘と極めて近いものである。

子どもが良い成績を残すこと、またそのために時間やお金をかけ努めることは、親としての役割や責務を果たしていること、延いてはより優れた親であることの一つの証となり、そこで生まれる誇りや高揚感、親としての自己に対する存在論的安心の獲得そのものであると言えるのではないか。これは、子どもの教育達成とそのための教育支援が、学歴達成とそれによる社会的・経済的地位の達成に繋がると言った将来的意味とは独立的に、その行為を行うこと自体に意味（存在論的安心）を見出す即時的意味、すなわち嗜癖の意味を持っているのである。

こうした教育支援の嗜癖的側面は、子どもの数が次第に減少し、さらに親子の関係が「純粋性」を増していくほど強くなるだろう。ギデンズが言うように、純粋な関係性は、それ自体「ひとへの嗜癖」をもたらすものである。教育支援という行為への嗜癖（第 2 章で言及したシェフの分類によれば「プロセス嗜癖」）は、子どもという「ひとへの嗜癖」と合わさることでよりその強度を増すだろう。この際に問題となるのは、メンデンホール（Mendenhall, 1989）が指摘するように、ある行為または関係性が持つ嗜癖性に「愛する者への善意」が含まれることによって、見えづらくることである⁶⁾。これは子どもに対する教育支援にも色濃く表れる特徴であると考えられる。例えば、「子どもには教育が必要だ」、「良い成績や良い学歴は子ども

の将来のためであり、そのために親が子どもの教育に熱心に取り組む必要がある」といった「善意」の籠った教育支援は、しかし一方では、親の安定的な自己アイデンティティの形成保持のための嗜癖的行為としての側面も持っていると考えられる。

5. 考察—嗜癖の比較社会学的展開可能性

本稿では、ギデンズの後期近代論における嗜癖の概念に着目し子どもに対する親の教育支援を捉えてきた。ギデンズの嗜癖論に立脚する限り、子どもに対する親の教育支援を一種の普遍的性質を持つ嗜癖として捉えることは出来るが、仮にこれを比較社会学的立場で地域や社会による差異を論じる場合はどうだろう。以下では、教育支援といった子どもに対する親の行動に注目し、ギデンズの嗜癖論、さらに後期近代論を批判的に捉えながら比較社会学的研究に対する発展可能性について考察する。

ギデンズの議論において重要な前提となるのは「前近代との断絶」であると考えられる。特に、ギデンズが近代を説明する際に議論の始点とする伝統の消滅は、彼の嗜癖論における一つの前提ともなっている。しかし、果たして嗜癖（ギデンズのいう「ひとへの嗜癖」も含めて）は伝統の消滅といった状況でのみ生じるものだろうか。

この疑問は、本研究で焦点を合わせてきた教育支援を例に挙げるまでもなく、嗜癖や共依存の議論が始まったアルコホリックを参照しても答えを見つけることができる。フェミニズムの観点から嗜癖を論じたKrestan and Bepko (1991) は、男性優位の文化に注目し嗜癖または共依存を論じる必要性を主張しており、浜口 (1982) は共依存の問題について、「間人的相互依存」といった歴史文化的特徴を持つ日本社会において共依存はむしろ一般的でさえあると述べている。

さらに、本稿で述べてきた教育支援または親子関係における嗜癖も、文化的要因または伝統的要因を含む予知は多分にあると考えられる。ここでは、韓国と日本を例にあげて考察することにしたい。周知のとおり、韓国と日本は非常に類似性の高い社会として認識されながらも、教育に対する社会のアスピレーションはかなりことなることが言われている（有田 2006、中村 2008）。この両社会の教育アスピレーションを教育支援の嗜癖性と置き換えて捉えると、その嗜癖性の差異を規定する要因の一つとして考えられるのは儒教文化などといった歴史文化的要因である。例えば、非

常に強い親子間の同一性（特に男性）を特徴とする儒教文化の下では、親は子どもに対して絶対的な権威を持ち、同時に子どもの出世は親の出世として捉えられ、それが一つの「孝」の実現であると認識されていた。こうした前近代的要素は、今日の韓国社会における教育支援と日本や西洋諸国との対比を論じる際には欠かせないものであると考えられる。というのも、ギデンズが想定している近代化は、数世紀といった時間を要した西洋諸国を例を前提にした「比較的長いスパンでおきた近代化」である。しかし、場合によっては前近代から近代への移行は一世紀の間、またはそれより短かった社会が存在する。その場合の伝統は、かりに社会構造が完全に近代的なものに入れ替わったとしても、ギデンズ (1991=1993) の言うように「すべて一掃される」とは限らない。

ここで主張しようとしている点は、各々の社会における近代化過程の特徴の故に特定の歴史文化的要素が、近代あるいは後期近代という時代状況の中で生じるとされる嗜癖を促す役割を果たしている可能性がある、ということである⁷⁾。こうした状況では、近代的な状況の中で生じる自己の再帰的モニタリングに耐えられなかった個人にとって、特定の行為や関係性がより嗜癖的なものとなる可能性がある。

仮にこうした伝統的要素に触発される嗜癖を「伝統的嗜癖」とし、ギデンズの言う様に伝統的要素とは無関係に生じる嗜癖を「非伝統的嗜癖」と区分してみよう。伝統的嗜癖の場合、その嗜癖に対する社会的合意は形成されやすく、その嗜癖に対する社会的なまたは個人的な再考の余地は少い。むしろ、そもそも嗜癖として認識すらされないままに普遍性を持って深化していきやすい。一方で、「非伝統的嗜癖」は、当の嗜癖に対する社会的合意といった推進力を持たず、嗜癖は逸脱的のものとして捉えられながら、あくまでも嗜癖者または共依存者同士の枠に留まった形で問題視される、という考え方が可能になるのではないだろうか。こうした考え方は、親の教育期待や教育支援などの比較社会学的研究、すなわち、なぜ特定の社会で親の教育期待と支援が加熱されるのかといった疑問に対する一つの手掛かりと成り得ると考えられる。

注

- 1) 子どもに対する親の意識に関する研究は、「子どもの誕生」で著名なアリエス (1960=1980) や、広田 (1999) や神原 (2004) などの歴史的研究、神田・高田 (2000) や片瀬 (2009)、本田 (2008) などの実証研究が存在する。

- 2) ギデンズに関する国内の代表的研究としては、宮本(1998)や筒井(2006)が挙げられる。
- 3) 「有毒な親」についてギデンズはS. フォワードを引用しながら、「子どもの自分にたいする依存や無力な状態を強めることで、自分を守ろうとするのである。自分たちは、子どものために最善をつくしている」と多くの場合信じ込んでいて、子どもの健全な発達を促すどころか、無意識のうちに健全な発達を徐々に害しているのである。」と説明している。
- 4) ギデンズと共に代表的な後期近代論者であるU. Beck and B. E. Gernsheim (1995) は、近代化(バックのいう第一から第二の近代への移行)における個人化をキー概念としながら、子どもと親のアイデンティティについて記述している。しかし、中村(2014)や山口(2002)のように、バックの後期近代論は、諸個人の主観的行為に対する概念的措置を持たない、といった批判も寄せられている。上述の議論に例えて言うならば、個人化されていく中で家族が情緒的安定感を失うのは何故なのか、そこに子どもへの愛情や執着が何を意味するのかといったよりミクロな視点が欠けていると言わざるを得ない。確かに、ギデンズによる親子関係への議論はやや単調で、バック夫妻が行った考察のように子どもへの愛情や執着に関する言及は少ない。だが、ギデンズの後期近代論は、マクロな構造の変化とミクロな個人行為の変化の両方を捉えるにより相応しく、彼の構造化理論がそうであるように、社会構造と個人の主体的行動の変化を相関的な観点からより広い範疇の理論としての可能性を持つと考えられる。
- 5) 石川ら(2004)も、子どもの年齢が上昇すると共に、子どもに対する親の教育期待もその種類や強度が変化すると指摘している。
- 6) 例えば矢澤(2000)やA. Sasagawa(2004)が指摘しているように、専業主婦といった立場にある女性は、自己の再帰的モニタリングの参照軸として子どもを用いる可能性が高いと考えられる。
- 7) ここでいう伝統的要素は、前近代において存在論的安心を担保してきた役割を果たすものではない。なぜなら、伝統も嗜癖も自己の再帰的モニタリングを抑制する働きをするからである。ここでいう伝統的要素とは、あくまでも嗜癖の行動や関係をより深め、あるいは容認され易くする間接的な働きをするものといった認識である。
- 引用文献**
- 中村高康 2014. 「後期近代の理論と教育社会学」日本教育社会学会編『教育社会学研究』, 第94巻, pp. 45-64.
- Schaefer, A. W. 1987. *When Society becomes an addict*. Harper and Row Publishers. (= 斎藤学監訳『嗜癖する社会』誠信書房, 1993.)
- 上野加代子 2001. 「アディクション・共依存の社会的構築」清水新二編『共依存とアディクション—心理・家族・社会』倍風館, pp. 182-224.
- 佐野信也 2000. 「精神科臨床医の立場からみた共依存—概念の有用性と限界について」吉岡隆編『共依存』中央法規, pp. 182-194.
- Sack, J. 2000. 「臨床心理学の立場から見た共依存」吉岡隆編『共依存』中央法規, pp. 195-203.
- Krestan J. and C. Bepko 1995. "Codependency: the social reconstruction of female experience." Babcock, M. and C. McKay Challenging codependency: feminist critique. University of Toronto Press: 93-110.
- Tallen, B.S. 1995. "Codependency: a feminist critique. Babcock, M. and C. McKay Challenging codependency: feminist critique. University of Toronto Press: 169-176.
- 斎藤学『家族依存症——仕事中毒から過食症まで』誠信書房, 1989.
- 清水新二 2000. 「家族と共依存」清水新二編『共依存とアディクション—心理・家族・社会』倍風館, pp. 16-53.
- 保田真希 2011. 「社会学的視点から見る「嗜癖」の予備的考察—ギデンズの後期近代論の検討」『教育福祉研究』第17号, pp. 88-89.
- Giddens, A. "Modernity and Self-Identity", Stanford University Press: Stanford, California, 1991. (= 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モタニティと自己アイデンティティ』ハーベスト社, 2005.)
- Giddens, A. "The Transformation of Intimacy", Stanford University Press: Stanford, California, 1992. (= 松尾精文・松川昭子訳『親密性の変容』而立書房, 1995.)
- 山田昌弘『近代家族のゆくえ—家族と愛情のパラドクス』新曜社, 1994.
- 中村高康『大衆化とメリトクラシー——教育選抜を巡る試験と推薦のパラドクス』東京大学出版会, 2011.
- 岩田龍子『学歴主義の発展構造』日本評論社, 1981.
- Mendenhall, W. 1989. "Co-dependency: Definition and Dynamics." Carruthand B. and Mendenhall, W. Co-dependency: Issues in Treatment and Recovery, The Haworth Press: 3-17.
- Krestan, J. and C. Bepko 1991. "Codependency: the social reconstruction of female experience." Bepko, C. Feminism and addiction, The Haworth Press: 49-66.
- 浜口恵俊『間人主義の社会日本』東洋経済新報社, 1982.
- 有田伸『韓国の教育と社会階層—「学歴主義」への実証的アプローチ』東京大学出版会, 2006.
- 中村高康 2008. 「教育熱と社会階層の日韩比較—年齢系列データによる基礎的分析—」有田伸編『東アジアの階層ダイナミクス(2005年SSM調査シリーズ13)』2005年SSM調査研究会, pp. 75-88
- Giddens, A. "The Consequence of Modernity", Politypress, 1992. (= 松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か?—モタニティの帰結』而立書房, 1993.)
- Ariès, P. 1960 *L'enfant et la vie familiale sous l'ancien regime*, Paris (= 杉山光信・杉山恵美子訳『<子供>の誕生—アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』みすず書房, 1980.)
- 広田照幸『日本のしつけは衰退したか』講談社, 1999.
- 神原文子 2004. 「<教育する家族>の家族問題」『家族社会学研究』第12巻, 第2号, pp. 197-207.
- 神原文子・高田洋子編『教育機の子育てと親子関係』ミネルヴァ書房, 2000.
- 片瀬一男 2009. 「教育アスヒレーションの規定要因における地域差—岩手県4地域の比較から」『人間情報学研究』第14巻, pp. 59-86.
- 本田由紀『「家庭教育」の隘路—子育てに強迫される母親たち』勁草書房, 2008.
- 宮本孝二『ギデンズの社会理論』八千代出版, 1998.
- 筒井淳也『制度と再帰性の社会学』ハーベスト社, 2006.
- U. Beck and B. E. Gernsheim "The Normal Chaos of Love", Polity, 1993.
- 山口節郎『現代社会のゆらきとリスク』新曜社, 2002.

- 石川由香里 他 2004. 「現代の親の教育意識と教育行動」 活水論文集, 第47集, pp. 79-107.
- 矢澤澄子 2000. 「『母』の変容と女性の人生設計・自立の困難」 目黒衣子・矢澤澄子編 『少子化時代のジェンダーと母親意識』 新曜社, pp. 171-193.
- Sasagawa M 2004. "Centered selves and life choices: changing attitudes of young educated mothers.", Mathews G., White, B. Japan's Changing Generations, Routledge: 171-188.

(指導教員 中村高康教授)